

# 10年後にスタンダードとなる製品開発を

石原ケミカル 時澤元一 代表取締役社長

6月26日付で、石原ケミカルの代表取締役社長に時澤元一氏が就任した（就任当時の社名は石原薬品）。時澤氏は1948年生まれの65歳。1967年に入社して以来、研究開発一筋で会社の発展に大きく寄与し、1991年に取締役研究部長に就任以降は要職を歴任してきた。いまもなお開発本部長を兼務する同氏に、今後の製品開発や就任の抱負などを聞いた。

## ——社長就任の抱負を

当社は、自動車用品、電子関連、工業薬品の3つの分野において、自動車用化学製品、金属表面処理剤および機器、電子材料、工業薬品という4つの事業を展開している。そこに新たな5つ目の事業を起ち上げることが、私の最大の使命だと考えている。

## ——具体的なビジョンは

当社はスマートフォンやパソコンなどに使われている電子部品用の表面処理剤を得意としており、いまはIC、半導体用スズ、ハンダメッキ液でアジア圏においてシェア7割を誇る。その電子関連分野に核となる5つ目の事業を根付かせたいと考えており、具体的には銅ナノインクの研究開発に注目している。

銅ナノインクは、印刷して光を当てると、銅ナノ粒子が光を吸収して熱となり、表面が溶けてくっつく現象が起きる。これをフォトリソリングといい、この技術を複雑な電子回路などの部品製造に活かし、実用化、そして市場導入できないかを模

索している。このプロジェクトは今年4月に新設した神戸工場を中心に取り組み、いずれは開発、製造施設として次世代の電子材料を供給する拠点にしたい。

——10月1日付で石原ケミカルに社名変更したが、意図するところは創業当初、医薬品の販売をしていた名残で社名に薬品を使っていたが、いまはケミカル製品が主力となっており、社名から事業内容が連想しにくい。取引先がコンシューマーであればブランド名がものをいうが、当社はボデーショップや企業などBtoBが中心となるため、社名が重要な意味を持つ。さいわいにも、皆さんに石原という名前は浸透しており、社名とビジネスを一致させ、より浸透させるために石原ケミカルとすることにした。

社名変更については、以前から話に挙がっており、常々どこかのタイミングでという考えを持っていたが、4月の神戸工場新設、新事業創設に向けた取り組み、そして社長交代など、さまざまな条件がうまく

重なったいま、変更する運びとなった。

## ——カーアフターマーケットをどう見ている

当社にとって、非常に規模の大きいマーケットであることは間違いない。一時期はコンシューマー向けに用品店などを中心に販売していたが、現在は鍍金塗装・整備分野を中心にシフトした。

しかし、少子化における人口減という問題に始まり、若年層の車離れや自動車保有台数の頭打ちの現状から推測すると、いま以上のマーケットの成長は期待できないだろう。

だが、社会の変化によって必ずチャンスは生まれるもの。例を挙げると車内消臭。十数年前まで、車内のイヤなにおいはエアコンが原因だと分かっていたが、エバポレーターを洗浄することができなかった。しかし、車の構造が変わり、エアコンフィルターが装着されるようになったことで、交換時にエバポレーターを直接洗浄することが

できるようになった。いまはエバポレーターの洗浄は定着している。

このようなイノベーションはほかにもあるはずで、どこよりも早く開発する必要がある。これは業界の共通ワードといえるだろう。マーケットで生き残っていくためには、常にアンテナを張りめぐらせて、絶えず変化をキャッチすることが重要だと考える。

## ——今後の製品開発および販売について

まずは、塗料の変化や現場の技術レベルに合わせて、より簡単に、よりきれいな施工ができるよう、商品を開発していきたいと考えている。

しかしながら、先ほども述べたようにマーケットは飽和状態にあり、いままでにない新しい付加価値を生み出さなければパイは増えない。

そのためにも、10年単位で業界を見る大きな視野を持つことが重要で、日夜、研究開発に努め、新たな製品開発にチャレンジし、10年後に業界のスタンダードとなるような製品を作りたい。新しいものを生み出すことができる会社だけが成長できると信じている。

販売については、既存の得意先とWin-Winの関係が理想。そのためにはより深く、親密な関係を築きあげたいと考えている。

——最後にユーザーへメッセージを  
ネガティブな視点になるが、鍍金塗装業界は成長性があまりなく、競争は激化の一途をたどり、現状においては厳しいといわざるをえないだろう。しかし、世の中が変化するとき、そこにはチャンスが生まれる。いま変革期を迎えているこの業界においても同じことがいえる。

当社は、経営理念に自己開発・商品開発・市場開発の「3つの開発」を掲げ、成長を遂げてきた会社だ。新しいマーケットの創出を目指して絶えずチャレンジし、チャンスを活かしたいと考えている。この気持ちを忘れることなく、ユーザーの皆さんに喜んでいただける製品開発を続けていきたいので、これからもよろしくお願ひします。

